Real Story

“これから”を歩む教員5 Stories

変わっていく未来、世界、社会。
その変化の中で、時には自己否定をしたり、
挑戦をしながら進化していかなくてはいけないのは、教員も同じです。
ここからは、さまざまな課題感や機会を流すことなくしっかりと捕まえ、
自分が変わることで自分の周りの世界を変えようとしている
5人の教員のストーリーをお伝えします。

Story 1

試行錯誤と内省で見つけた
先生や生徒と協業する
本当の価値

生徒や先生とすれ違った過去。正しさを捨て、相手の声を聴き共に学びの場をつくるように

金井達亮（たつあき）先生
東京大学大学院教育学研究科
学校教育高度化専攻
教職開発コース

私立の中高一貫校を経て、かえつ有明中・高（東京・私立）の教員に。同校で他の先生と一緒に、高等部の「プロジェクト科」の授業をゼロからつくりあげる。2018年に退職し、東京大学大学院に進学。

生徒の変容や心情の吐露から教員の自分が何よりも学んだ

新卒で勤めた中高一貫校で、校則違反をした中学1年生の男子が適当な反省文を書いたので厳しく叱ったら、学校に来なくなった。しばらくして復帰したが、以前の明るさが嘘のように誰とも話さない。このことに端を発する出来事は、金井達亮先生に多くの学

取材・文／松井大助

びをもたらしたという。

何よりもまず、自分がなりたかった教師像からブレたことを自覚した。

「僕の母校の校訓は『自由・自主・自律』。その気風を大事にしたかったのに、生徒には真逆の縛りつける指導をしていた、と気付いたんです」

だから金井先生は、同僚と共に生徒主体の活動に力を注いだ。生徒が自ら考える模擬裁判や、商品開発の授業。すると生徒たちは徐々に自分を表現できるようになり、懸案の生徒も明るさを取り戻した。そうした変容を見守れたことも、得がたい経験だった。

さらに彼が20歳の時、同窓会で金井先生が詫びながら当時の心境を尋ねると、「実は先生のせいではなく、前からのモヤモヤがあの時に爆発したんです」と語ってくれたという。

「人の内面ではいろいろなことが起きている。自分に見えている世界と、内側にある世界は違うかもしれない、という大事なことも教わったんです」

教員同士の学び合いで、自分の在り方を見つめて発表したときの写真。生徒が何でも言い合える場をつくるには、教員同士が腹を割ることが大事だと考えた。

生徒主体が「正しい」という思いが教員間の軋轢を招いた

一連の出来事を通して、金井先生は「生徒主体の活動が正しいんだ」との思いを強めるようになる。

そこにまた別の落とし穴があった。

「自分とは考えの違う先生を『正しくない』と感じ、それが態度の端々にも出てしまい、今度は先生同士の関係性が崩れてきてしまったんです」

結局、金井先生は一部の先生とはぎくしゃくしたまま、新天地のかえつ有明中・高校に転職する。同校が今までにないカリキュラムのコースを創設すると耳にし、その授業開発に携わりたくなったのだ。頭の中にあったのは、課題解決をしながら学ぶProject-based Learning（以下、PBL）を、コミュニケーションを大切にしながら行うことだった。

「東日本大震災後のボランティアで、被災された方の話を真剣に聴くことが相手の力になることを感じたり、ノンバイオレント（非暴力）コミュニケーションを学ぶなかで、生徒が主体的になれるよう勇気付けるには、誰もが相手の話に耳を傾け、何でも言い合えるような場をつくることが必要だと思うようになったのです」

その構想は、回りまわって自分の在り方を省みることにもつながった。

「身近な先生相手に、僕はそうしたコミュニケーションができなかった。価値観の違う人がいても、その相手と一緒に何かを生み出すことを楽しめる人になりたい、と思いました」

生徒の声も先生の声も大事にしその場の全員で学び合いたい

かえつ有明中・高校では、金井先生を含む10名の教員で新コースの中身を考えた。その議論は必ずしも順調に進んだわけではなく、当初は案外、ぎすぎすしていたという。

そこでメンバー全員で行ったのが「お互いをわかり合うことを目的とした合宿」だ。初日にペアで1時間ずつインタビューし合ったり、他己紹介をしたりと、相互理解に努めた。そうして心の距離を縮めてから翌日に新コースのことを話し合うと「各自の思いがぶわっと出た」という。

「このプロジェクトが本当に動きはじめたのは、そこからでしたね」

教師として目指したい授業の在り方もより明確になっていく。

「授業でどんな世界をつくりたいのか十分に準備をし、でも授業が始まれば生徒の声に耳を傾け、その関係性のなかで生まれたものをキャッチし、生徒だけでなく教員も学ぶ。最終的にその空間にいる全員が『お互いに授業の学びをつくっている』という感覚になれたときに、クリエイティブな授業になるのだと思います」

ほどなくして金井先生は、独自のパターン・ランゲージ（※1）をつくるプロジェクトにも数名の先生と関わった。これも一つの転機となる。

「一人では思いつけないものを全員で生み出せたわくわく感があり、加えて、各メンバーがパターン・ランゲージをつくるプロセスで学んだことを授業や学級運営に生かし、先生たち自身がすごく変容したんですよ。それが印象的で。いわばこのプロジェクトが、僕たち教員のPBLになったのです」

こうした教師の変容や成長のことを、金井先生は実践だけでなく理論も含めて学びたくなった。昨年秋、かえつ有明中・高校を退職し、東京大学大学院に入学。現在は声をかけてくれた学校で協働の授業開発や実践をしながら、教職開発について研究している。

「今はいち教師として何ができるかより、誰かと一緒に学びの場をつくることに興味があるんです。その過程で自分の想像を越えるものが生まれることや、お互いが変容していくことを、楽しんでいきたい、と思っています」

かえつ有明中・高校のパターン・ランゲージのプロジェクトメンバーとは、カナダの国際学会にも参加し、海外の先生とも交流した。

（※1）パターン・ランゲージとは、状況に応じた判断の成功パターンを抽出し、言語化するもの。

Story 2

自ら地域に飛び込むことで
社会と生徒をつなぎ、
大学院で実践と理論をつなぐ

生徒が本物の体験をする場を地域の大人と一緒に企画・運営。社会の共創を目指すように

西野功泰先生
札幌大通高校（北海道・市立）
商業科・情報科教諭

北海道立高校の教員を経て、2008年より現職。2012年から教育を実践し省察する福井ラウンドテーブルに参加、2015年には札幌ラウンドテーブルを立ち上げる。2018年、福井大学連合教職大学院入学。

指導案を作り込む前に生徒理解が必要だと感じた

大学卒業後、期限付き教諭として昼間定時制高校に勤務した西野功泰先生は、最初の授業で大失敗したという。指導案を練りに練って臨むも、一番前の生徒が注意してもずっと寝ていて、気になって大崩れしたのだ。

授業後、別の生徒が教えてくれた。「あの子は新聞奨学生。朝の新聞配達後だから仕方ないよ」と。この出来事が、西野先生の原体験となった。

「指導案よりも生徒一人ひとりを知ることが先だ、と痛感したのです」

北海道で正規採用されてからもその姿勢は変わらない。配属先は3年後に閉校が決まっていた道立高校。3年目に進路指導部長を任されると、最後の卒業生となる80名から進学や就職の希望、悩みを聞き取り、生徒が名を挙げた大学や企業は全部回った。すると企業回りで予期せぬ反応をもらう。面接指導の協力の申し出など、地元の生徒のために積極的に力を貸してくれようとしたのだ。

「地域の人たちの温かさが嬉しくて、ぜひ一緒にやりたいと思いました」

だがこの話は頓挫する。特定企業との連携は難しいとの学校判断だった。

生徒を社会に送り出す学校が、社会に属する企業と協働できない。西野先生は「学校や教員はどうあればいいだろう」と自問するようになる。そんなときに、札幌市に三部制・単位制・定時制の市立高校ができることを知り、同校の掲げた理念が目に飛び込んできた。

「社会に近い、開かれた高校」

手探り状態をチャンスと捉え地域の大人や生徒と一緒に企画

西野先生はこの高校でどうしても働きたくて、札幌市の教員採用試験を受け直すことを決心。見事突破し、市立札幌大通高校の教員となった。

創立時の学校はすべてが手探りで、「何をすればいいかもっと教えてほしい」と不満を感じたことも。だが先輩から「この状況をチャンスと捉えよう」と励まされ、腹をくくった。

一つ、抱いていた思いがあった。

「進路の話をすると生徒が暗くなるんですね。身近に憧れの大人がいなくて目指すものもなく、社会に出るのを不安がっている。もっと生徒が『社会でこうしたい』と楽しく話をできないか。そのために何が必要か考えたとき、生徒が地域の大人と一緒に『多様な価値観にふれ』『疑似ではない本物の体験ができる』場をつくりたいと思ったのです」

そこで地域の大人とつながろうと、地元の異業種交流会に飛び込んだ。関心を寄せてくれた企業の社長やNPO代表を学校に招き、生徒も交え議論し、「何ができそうか」を一緒に考えた。最初の一歩は、有志の生徒と大人による地域のごみ拾いから。

地域の人との打ち合わせは、今の西野先生には日常のこと。写真は道内の高校生を参加対象とした「高校生チャレンジグルメコンテスト」の実行委員会。

取材・文／松井大助

開校5年目には、地元のシェフやイベント主催者らと共に、生徒が養蜂やハチミツの商品開発・販売に挑める〝教科横断型〟ミツバチプロジェクトも始動した。蜂の生態を学ぶ理科の授業、ハチミツを材料に調理する家庭科の授業、商品開発や販売実習をする西野先生の商業の授業などを組み合わせ、生徒が関心ある授業を柔軟に選択できるようにしたのだ。

ミツバチプロジェクトがメディアで紹介され話題になると、企業や行政からの連携の打診も増え、活動の幅がさらに広がる。例えば「まちなか職場体験」。小学生が地元商店街で1日職場体験できる場を、札幌大通高校の生徒が事業者と一緒に創出する。

「まちなか職場体験には不登校経験者など困り感を抱えていた生徒も多数参加し、小学生のために、と最後までやり抜いたんですよ。社会に開かれた学びの効果を実感しました」

数カ月活動する「まちなか職場体験」。他にも短期、長期のさまざまな地域の大人との活動がある。2017年度より一定時間の活動で単位認定もするように。

人をつなぎ、実践を理論付け社会と共に創造する学校へ

目下の課題は、こうした活動をいかにしてこの先も継続していくかだ。

「活動内容を全部パッケージ化して『これをやって』と次の先生に引き継ぐと、やらされ業務になって衰退しかねません。そのため、今試みているのは『人』を引き継ぐことです。若い先生方に、活動を牽引する地域の方々を紹介し、お互いの思いを基に活動をさらに発展させてもらおう、と」

また、西野先生は昨年より、教員を続けながら、福井大学連合教職大学院に通い出した。高校で本物体験を展開しつつ、それが生徒や社会に何をもたらすか「実践を理論付ける」ことにも挑み、自分を含む全国の先生がこうした活動により見通しや自信をもって臨めるようにしたいからだ。

「研究テーマには『社会に開かれた学校から、社会と共に創造する学校へ』という言葉が浮かんでいます。生徒が地域に入って学ぶと、一緒に活動する大人も真剣に学び考え、結果、皆で『まちを創っていく』ことにつながると感じているんです。生徒も教員も地域の大人もそれぞれの立場から学び、地域貢献もしていく。そうした場を、ヒト・モノ・コトをつないで生み出していきたいです」

Story 3

学校の外の人とつながることで、教員としてのキャリアも広がる

ネットで発信、自ら人を集めて行動に移したことで、自分の価値が見えてきた

江藤由布先生
香里ヌヴェール学院
中学校・高校（大阪・私立）
学院長補佐

近畿大学附属高校で21年間英語教員として勤務。2015年、「人生の経営者を育てる」ことを目標に社団法人オーガニッククラーニングを立ち上げ、Edupreneur®（教育事業家）として活動の幅を広げる。2018年から現職。二児の母。

質より量の授業で実績は上がるしかし、心が疲弊していった

「21世紀型教育」を目指し学校改革を進める香里ヌヴェール学院。江藤由布先生は、改革を推進する学院長補佐として昨年同校に転任した。江藤先生が設立・運営している教員の協働の場「オーガニッククラーニング」の活動に、同校の石川一郎学院長が共感したことで抜擢されたのだ。

江藤先生が考案したオーガニックラ

取材・文／長島佳子

オーガニックラーニング主催で毎年実施している教育イベントの「ラーニングスプラッシュ」。昨年は事業家と教育者が相互に学び合い、実際に使えるアイデアを創造する、「超」フィールドワーク型研修プログラムを実施した。

ーニングとは、有機農法が土壌の改善に力をかけるように、マインドセットの開発にじっくりと取り組み、アクティブラーニング（以下AL）による学びを浸透しやすくすることで、生徒の成長を早め、生涯学習力をつける学習アプローチのことだ。それを現場で実践しながら、さまざまなワークショップやセミナーを企画し、全国の教育関係者とのつながりを広めている。

しかし、21年間勤務した前任校での最初の10年は、生徒たちを偏差値の高い大学に進学させることをミッションとしてきた。

「圧政をしいて生徒を怒鳴りつけ、質より量で、生徒に膨大な問題集やテストをやらせていました」

しかし、長男の出産・育児を境に、働き方を変えることを余儀なくされた。効率を上げるために、生徒がリーダーとパートナーのペアとなり、他己採点やペアワークで授業を進める仕組みをつくった。省力化と平均的な成績アップは達成できたものの格差は広がったように感じた。そのころ、学級崩壊の夢を頻繁に見るようになった。

「成果は上がっても、自分の心が喜んでいなかったのです。自分がありたい姿はこれではないと感じていました」

教員歴15年を過ぎて、初めて自分が必要とされていると実感

特進コースの担任を長年経験した後、新設の英語特化コースを受け持つことになった。同じころ、学校にICT導入が始まったことが、江藤先生の転機となった。

「英語特化なので、オールイングリッシュなどやりたかった授業ができると思いました。また、iPadを貸与され、自分もオンラインの世界に出てみたのです。以前から情報収集にWebは活用していましたが、自分から発信してみようと、ブログやSNSを始めたのです。すると人が集まってくる。自分がやっていることに価値があるんだと、人生で初めて自分が必要とされていると感じることができました」

英語特化コースの2年目に、次男出産のために半年間の育休に入る。自分が不在でもiPadを使って生徒たちが自主的に学べるような仕組みをつくった。

「育休後は二児の育児との両立が待っています。生徒を管理下に置くことを諦めて手放し、彼らの自主性に任せるタイミングでした」

復帰後は、生教材、オールイングリッシュ、AL、反転授業を取り入れた授業を推進。プロジェクトベースの授業を行っているうちに、生徒が自分たちでプロジェクトを立ち上げるなど、教員の予想を超える発想で活動をするようになっていた。

個人の取り組みでは、学校内外の教育関係者を集めたワークショップなどを主催し始めた。

「ソーシャルキャピタルが一気に増大していきました。周りからフィードバックをもらうことで、自分の在り方をメタ化することができるようになったのです」

誰でも必ず価値をもっている それを人に提供する活動を

2015年にアップル社のApple Distinguished Educatorsに選ばれ、世界の教員が集まる研修に参加した。海外ではALや反転授業は珍しくないため、自分の強みについて考えたとき、生徒たちのマインドセットを変えていくことだと気付いた。それを有機農法の土壌開発になぞらえて「オーガニックラーニング」というコンセプトをたてたのだ。

「自分のライフワークを見つけたと思いました。このコンセプトに共感してくれる仲間をひろげるために、社団法人を立ち上げました」

オーガニックラーニングの活動を通じて多様な仲間と出会うなか、さらに自分の心が喜ぶ方向に飛び立ちたくなり、前任校から巣立つ決意をした。

「自分を変えるには、ソーシャルキャピタルは不可欠です。学校の中だけにいると、自分を相対化することができません。オンラインの世界に出れば外の人とも簡単につながれます。

リアルで参加する研修などは、人から与えられるだけでなく、少人数でも自分から人を集めて価値を提供する経験も必要です。誰にでも必ずある独自の価値の発見にもつながります」

自分自身は人に元気を与え、コラボするパートナーを見つける天才だという江藤先生。今後の目標は、若手の先生たちが改革の担い手となれる土壌をつくっていくことだと語る。

オーガニックラーニング設立3周年のパーティーで。香里ヌヴェール学院・学院長の石川先生（右）との出合いのきっかけとなったのもこの活動からだった。

Story 4

一度社会へ飛び出すことで
リアルな経験と多様性を
学校へ持ち帰る

学校で、外の世界で、生徒や自分に必要なものを発見。チームによる教育を目指す

寺西 望先生
金沢高校（石川・私立）
高大接続改革実行本部　副主任

石川県の公立高校に4年間勤務。民間企業に転職後、ブライダル事業者への広告の営業や、学校への教材の営業に5年間携わる。同時期に、教育活動や地域活動を行うNPOにも参加。2017年に金沢高校に着任。

内面を引き出すだけでなく本物の体験も届けなければ

寺西 望先生は教員になってから「思うようにいかないなあ」と感じた部分がある。学生時代に「生徒が内面を振り返り、自分の意志で進路を決めるような教育をしたい」と思い、ノウハウを学んだ。石川県の公立高校に着任後、満を持して自分を省みるワークショップや面談を行った。

「ですが、生徒の内にある体験がまだ少なく、内面を振り返るだけでは半数以上がやりたいことや自分の強みをうまく見出せなかったのです」

折しも初任校は、商業科の教員を中心に、地元産業や市役所と連携した「体験的な学び」に力を入れはじめていた。寺西先生は、こうした学びと、内面の振り返りの両方があってこそ、生徒の主体的な進路選択を促せると感じた。でも同時に、「今の自分では、商業科の先生のようなことはできない」とも思ったという。

「どんな仕組みで社会が回っているかも、企業や行政とどうコミュニケーションを取ればいいかも全然わからなかったからです。外に出ていろいろ経験してみたいと考えはじめ、教員4年目に、転職を決意しました」。

企業でも教員の力は通用した だがチーム力はそれを上回った

外の世界を経験したかった理由がもう一つあった。担当教科の数学のことを、寺西先生は生徒に「二次関数を将来使わなくても、その勉強で鍛えた論理的思考や問題解決の力はどこでも生きる」と話してきた。それが真実か、自ら試したかったのだ。

挑んだ仕事は、ブライダル事業者への営業。結婚式を行うホテルやレストランに、情報誌に広告を出してもらえるよう、要望や課題を聞き出し、優先順位を考え、最適な広告の提案をする仕事だ。数学で鍛えた力は、その戦略立案に確かに役立った。

だが自分に欠けていた部分も思い知らされる。先輩の社員に、高校卒業後に接客業を経て入社した同い年の女性がいたのだが、彼女のほうが成績は断トツで良かったのだ。

「その先輩はお客さまへのヒアリングがうまく、でも戦略立案はあまり得意ではなかったんですね。彼女はそこをロジカルな思考に長けた仲間に協力を仰いでカバーしていました。一方で僕は、聞く・考える・伝えるという全業務を1人でやろうとした。個の力ではなく、チームで協働してこそ成果を出せるのだと学びました」

企業人時代、プライベートの時間を費やし立ち上げに携わった小松サマースクール。高校生が海外の学生と共にリベラルアーツを学び、自分の将来も考える。

合意形成や決断をするなかで自分の軸をもつ大切さを実感

企業で働いた5年間のうち、途中からは地元のNPOおよび行政の教育活動や地域活動にも関わった。なかでも

取材・文／松井大助

かけがけのない体験となったのが、小松サマースクールという、今も続く夏季研修プログラムの立ち上げに運営委員長として携わったことだ。

「小松市でホームステイの受け入れをされていた方々と知り合い、訪れる海外の学生と日本の大学生による高校生向けサマースクールができたら面白いという話になったのです。地元のほか全国からも高校生の参加を募り、多様な人と交流しながら学ぶ。そんな場を実現させたくて、挑戦しました」

寺西先生にとって0から1を生む初めての事業。スタッフの募集、プログラム作り、地元での協賛金集め、集客などなど、やるべきことは多く、時間優先か質の追求か、成功重視かチャレンジかなど、リーダーとして重大な決断を何度も迫られた。

「合意形成や決断の難しさを痛感しました。複数の選択肢について、意見を聴いて情報をいくら集めても、どれにも良い面があることは多く、自分に『こうしたい』という信念や軸がないと、決断のたびにぶれてしまうんです。そのことを身をもって学べたので、生徒たちの中にも軸となるものを育みたいという思いは一層強くなりました」

金沢高校の経済産業省中小企業庁と連携した起業家プログラムの授業。他にも金沢工業大学や北陸大学と連携したプロジェクトを同僚と共に進めている。

チームの一員として貢献し学校と外のハブにもなりたい

31歳の時に教職に戻った寺西先生は、現在、金沢高校勤務2年目となる。生徒が自分で道を切り拓くような教育をしたい、という目標は以前と変わらない。ただし、その教育をどうやって実現させるかという考え方には、変化が生まれた。

「まずは僕自身が『先生たちから学び、チームの一員として貢献できる教員』になりたいと思っています。生徒指導や教科指導など各分野に長けた先生から学び、力もお借りして、そうした先生方が得意分野でもっと活躍できるよう、外部との連絡調整など自分にできることはサポートする、といったように。そのうえで、これまでの経験を生かして『学校と外をつなぐハブの役目を担う教員』になりたいです。先生たちはすごく力をもっているし、学校の外にも頼れる人はたくさんいます。その全員が自分の強みを生かして最大限の力を生徒のために発揮できるよう、学校やこの地域にチームを築いていきたいのです」

Story 5

自ら学び続ける生徒を育てるために選択した、“教えない授業”

教員・生徒共に持続可能な学びとは何か。それを求めて仲間と変革の流れをつくりたい

山本崇雄先生
武蔵高校・附属中学校（東京・都立）
英語科教諭

1970年生まれ。94年東京の公立中学校の英語教員としてスタート。2017年より現職。前任校の都立両国高校・附属中学校からの同僚である山藤旅聞先生と共に、学外で「未来教育デザインConfeito」を設立し活動中。

東日本大震災で痛感した生徒が自ら学ぶ力の必要性

『なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか』という著書で、生徒たちが自ら学ぶアクティブラーニング型（以下AL型）授業の有効性を伝えてきた山本崇雄先生。一昨年には、すべての大人で未来の教育を考えるためのプロジェクト「未来教育デザインConfeito」を同僚

取材・文／長島佳子

生徒同士がペアで説明し合う山本先生の英語の授業。ペアはタスクごとに変わっていく。先生は生徒の様子を観察し、必要に応じて声をかけている。

の先生と共に設立。講演や出前授業、ワークショップなどを精力的に行っている。そんな山本先生も、以前は従来の講義型授業をしていた。

「若いころは、『わかりやすい授業が良い授業』と思い、多数の資料を作り、一生懸命説明する授業をしていました。けれど、教員が準備に疲弊し、生徒も大変そうな授業が持続可能なのかという漠然とした違和感がありました」

そんな想いを抱いていた2011年、東日本大震災が起きた。被災地に赴き、親や教師を失った子どもたちを目の当たりにしたとき、「もし自分たちがいなくなったら、子どもたちの学びはどうなるのか」という無力感に襲われた。「大人がいなくても、自ら学び続けられる生徒を育てなければいけないと、気付かされました」

生徒自身が学び方を選択し選んだ方法で最善を尽くす授業

震災からほどなくして、ケンブリッジ大学での英語教授法の研修に参加する機会を得た。そこで模擬授業を実施した際、「生徒にレールを敷いて教えすぎている」と指摘された。

「それまでの教員経験を否定されたのです。生徒役としてケンブリッジの先生たちの授業を受けると、自信のない発言も否定せずすべて受け入れてくれたり、学ぶ方法を生徒側に選ばせてくれることに、カルチャーショックを受けました。例えば音読する際にも、一人で読みたいか、仲間と一緒に読みたいか選べるのです。自分で選ぶからこそ責任が生まれ、学びの自立に近づいていくのだと目から鱗が落ちる思いでした」

帰国してすぐ、生徒が選択する授業を試してみた。教科書の学ぶ範囲を分割し、グループごとにジグソー法で協働して内容を伝え合う方法だ。すると生徒たちが、今まで以上の笑顔で、能動的に楽しそうに授業に臨むようになった。生徒たちがイキイキと学ぶ姿に確信をもった山本先生は、教員が手取り足取り教えるのではなく、生徒が学び方を考え、選ぶ、生徒主体の授業へと転換させた。

「教員は教えなくていいので、生徒を観察する時間が生まれます。生徒がつまずいていたら、英語の知識ではなく学び方、調べ方を教えればいいのです。迷っていたら励まし、成長していたらそれを本人に伝えることで、さらにやる気を出して成長していきます」

選択には責任がともない、選んだ結果で手を抜いたら学力が身に付かないことも伝える。

また、生徒と教員は対等なパートナーシップであるべきと山本先生は語る。

「昨年、東京の国連でSDGs*（持続可能な開発目標）について生徒と共にスピーチをする機会がありました。生徒が自分の経験を英語で話したとき、会場から『希望を見た』と声があがりました。生徒には意見もアイデアもありますし、世の中を変える発信力もあります。ITなどは生徒から学ぶことが多いです。生徒と教員が『指導』ではなく双方向の『協働』関係になければ、本当の意味での授業改革はできないと思います。AL型授業も『やらせる』のは本末転倒で、生徒視点でやりたい方法で学んでいるかどうかが大切です」

社会課題と学校の学びを仲間と共につなげていきたい

山本先生が教員としての自身の在り方をダイナミックに変え、ブレずに今日まで続けてこられたのは、社会の変化を痛感しているからだ。

「AIの出現のみならず、国連サミットで採択されたSDGsは全人類共通の課題です。その混沌とした社会に生徒たちを送り出すために、学校は何をすべきか考えなければなりません。社会課題と教科の学びがシームレスにつながる学びを提供すべきだと思います。それがPBLであり探究です。社会の変化から逆算すれば、学校や教員がやるべきことは見えてきます。教員は社会がどうなっているか、もっと興味をもつべきではないでしょうか」

もう一つ、山本先生を後押ししたのが仲間の存在だ。前任の両国高校時代から、志を共にする先生方がいた。

「学年や教科を超えた仲間がいました。全員が同じ方法ではなく、多様性があっていいと思います。生徒にとって選択肢は多い方が良いからです。また、我々のやり方に反対する先生がいても否定せず、『自立した生徒を育成する』という目標の目線さえ合わせられればいいと思います」

新しいことを志す仲間が全体の3割くらいになると、組織が活気づきだすと山本先生は感じている。

「もしも校内に仲間がいなければ、Confeitoに参加してほしいです。学校を超える仲間をつくるためにつくった組織ですから」

国連でSDGsについてスピーチを依頼された際、同席させた附属中学の生徒による英語のスピーチで、会場の雰囲気が一変し参加者がみんな笑顔になった。

*SDGs（エスディージーズ）とは「Sustainable Development Goals」の略称で、2015年の国連サミットで採択された国際社会共通の目標。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、“地球上の誰一人として取り残さない”ことを謳っています。